□浅野一男：**植物への挽歌（改訂版）** B5. 275 pp. 2010. ￥1,600＋税. 文芸社. ISBN: 978-4-286-08648-4 C0040.

前版は1998年に本誌に紹介したことがある．その内容を評価した上記の出版社からの勧めにより，今回の改訂版となったとのこと．前版では個別の植物についての記述が多かった（43種類254頁）のが27種類183頁に減っている．そのかわりに種類ごとの記述は平均5.9頁から6.7頁に増えていて，その後の知見を加えると共に，人との関わりにより重点が置かれたように思う．前書では7頁に過ぎなかった下伊那の植物と民俗の章は，下伊那の植物相として46頁を充ててあるが，民俗はごく簡単になり，植物社会学的，植物地理学的な内容になった．最後の絶滅危惧種の選び方の章は，著者の主張である，地域ごとのレッドリスト作りの具体的手法を述べたものである．口絵のカラー写真は旧版より数が減ったが，大型できれいになった．

全体としては，旧版より個々の植物の記述が減ったために，それに伴っていた方言や民俗植物学的情報が乏しくなった反面，学術的な色合いがより強くなったと思う．植物の種類が変っていくという現象は，失われた種類と人の生活上の関わりが失われていくことも意味するのだから，そのプロセスを調べる手法と共に，失われた関わりを記録にとどめることも必要だろう．その点では，個別植物の部分を，前版と異なる種類を対象にしたら良かったのではないかと思った．（金井弘夫）

□菱山忠三郎：**身近な野草・雑草** 18 × 23.5 cm. 367 pp. 2010. ¥1,600＋税. 主婦の友社. ISBN: 978-4-07-270484-4 C2077.

これはいわゆる「図鑑」の部類には入らない…と言っても，著者が目を剥くことはあるまい．検索表もなければ学名もない．索引は和名についてのものだけである．出ているのは草だけだし，葉の細いものやシダ類のような地味なものはあまり入っていない．その代わり，センダングサ，ブタクサ，オナモミなど，話題性のあるものは，スペースを与えられている．

配列は春，夏，秋に分かれ，それぞれの中は人里，山麓，湿地・水辺，海岸と分けて，469種類のカラー写真が1頁1種類ずつ載っている．これでは本の頁数より多いことになるが，ところどころに類似種の小さな説明があるためである．写真は花つきの株の全形，花のアップ，果実，種子などのほか，変わり者，毛の様子，芽生え，ロゼットなど，著者永年の蓄積が披露されている．説明はごくアッサリしたものだが，こういうタチの本なら，もっと好き勝手なことを書いてもよかったのでは…と思う．

この本を手にして野山へ出かけるには大き過ぎるが，手元に置いて庭や近所の雑草の知識を増やすのには良かろう．歌詠みや物書きの人たちがこういう本を参考にしたり，絵を描くときに形や色を確かめたりするのに有用だと思う．研究者でも「こんな姿があったか」と思うような映像に出会うことがあるだろう．いずれ樹木についても，同様なものが期待される．（金井弘夫）

□太田久次（著）・太田久裕（編）：**新版三重県帰化植物誌** A4. 316 pp. 2010. ￥8,000. ムツミ企画. ISBN: No number.

2008年2月7日に亡くなられた著者の遺言により，ご子息が遺稿を整理して刊行したものである．写真や図表は原図が見つからないため原稿のコピーによるものが多いそうで，前著 (1997) より出来映えが劣るのは止むを得ない．本文も慣れない推敲作業だったようで，引っかかる箇所がところどころあるが，本質的なものではあるまい．

結果として，採録種類数は677種類と，前著より135種類増加している．目録は130頁にわたり，県内の産地が日付と共に記録されている．このスタイルは前著と同様で，帰化植物の発見にのみとらわれず，その変遷を記録しようとする著者の姿勢がうかがえる．目録に先立つ総論は109頁で頁数は前著と同程度だが，前著はB5版であるのに対して本書はA4版なので，内容は増えている．とくに，経済や流通環境の変化に伴う帰化植物の産状の変化が記録されている．

永年にわたって帰化植物の調査・記録に努力された著者の業績を，周知のものとされた編者の努力を多としたい．編者の連絡先は510-[redacted] 鈴鹿市[redacted]．なお，著者の植物関係の遺品は，すべて三重県立博物館に引き取られたとのことである．（金井弘夫）